

沿革の叙述の詳細なるに重點を置いたのであるが、附録設置の間に於ける消息判然としないものがある。尙之は附録南北朝刑法志に於て特に見られる處であるが引用に際して出典を明示してゐない點である。前者が一二を除くの外正史に刑法志を缺いて居り他より補綴せられたものであることは前述の如くであるが、之を補つた場合殆んど出所を明確に記して居ないので、原典に當るに際して少からず不便を感じる。惟ふに一貫せる記事を作成する場合に數種の書を引用する爲め、一々出所を擧示することの煩瑣なるを厭ひし故ならんと推察せらるゝが、原典の補訂刪除に當つては必ず其理由を註し出典を明確に指示しおく要あるは言ふを俟たない處である。

斯く看じ來ると本書は種々缺點を有してゐるが、從來殆んど完成され得なかつた二十四史の刑法志を見も角此れ迄に纏め上げた勞は多とすべきであると同時に之に依つて支那法律發達史を窺知することが比較的容易であり、又無數の見出しは索引的存在價值を有するものとして史料蒐集の場合甚だ便利であることを感謝せねばならない。更に序文に述べられてゐる様に讀者

が本書によつて中國の固有法制精神を深切に認識することが出来るならば、此の編纂に於ける編者の期する處に庶幾せるものと言へよう。茲に本書の上梓を祝福すると共に、前掲歷朝律考以下の刊行の際先きに述べた諸點が是正せられんことを希望して已まないものである。(岡本午一)

Marginalia to the Histories of the Northern Dynasties.

by Peter A. Boodberg

Univ. of California.

其一 Theophylact Simocatta on China.

紀元六、七世紀のビザンツ史家テオフィラクツス・シモカッタは彼の *Historiae* 第七卷に東亞の大王國(即ち支那)に關する記述の爲に一節を割いてゐるが、この資料は突厥から獲られたもので、マルコ・ポーロ以前に於ける歐人の支那に關する見聞の尤なるものである。その支那に關する十五項の記事は、事實と虛構との混合であるとされてゐるが、支那史料と對照批判するべきである。

以下の各項に就いて検討する。

(6) その國は大河によつて二分せられ、その河は、一つは黒衣を、他は赤衣を着てゐる兩國國民の間の境界をなしてゐる。

(7) Maurice 帝 (582—602 A. D.) の世、「黒衣」は河を渡り、「赤衣」を征服し、全帝國の主となつた。

大河とは何。赤衣・黒衣とは何か。著者は六朝正史から多くの事例を引用し、精細な考證を進めてゆく。

陳の後主が夢に黃衣の軍が彼の都を圍むと見たのは(隋書卷二十三)隋の軍服の制式である。陳の軍服の色は梁制に沿ひ、普通の場合赤色であつた。一方北朝に於ては北周は黒、北齊は赤であり、561 A. D. に隋が周を襲つた後、約四ヶ月位は軍服の黒色を改めなかつた。高歡は韋孝寛と戦ひ利あらず、翌年死んだが、その頃、黑蟻と黃蟻とが鄴城に闘ひ、黃蟻が死んだ。これ高歡の敗兆であると當時一般に信ぜられた。(北齊書卷二、六)邙山の戦の時、高歡は道士基母懷文の勧めにより、西魏の黒色(黒は水徳を示し、火に尅つ)に尅つため、旗幟の色を黄色(黄は土徳を示し、水に尅つ)に更へた。(北齊書卷四十九、北史卷八十九)以下、梁

書卷五、隋書卷二十三、北周書卷七、北史卷八、北齊書八、の證佐により、東西魏(534—577 A. D.)の軍隊は、東魏(北齊)は赤又は黄、西魏(北周)は黒と、軍服の色により明瞭に區別され、占術や民間においてもこの聯想は明確であつた。

この服制が兩國共に交渉深かりし突厥を経由してビザンツに傳へられた。だからシモカツタの記事は主として北支に關したものの、大河とは黄河であつて、揚子江のことではない。齊の征服されたのは(577 A. D.) Justin II の世でモリス帝の時ではない。しかし、この記事の源を考へると、モリス帝にあてた達頭可汗の書(598 A. D.)か、突厥に駐在せるビザンツ大使によりコンスタンツノープルの内府に集められた材料によるかである。若し前者ならば、可汗はモリス帝と治世を略同じうする所から間違つた。(Tardieu 汗は 576—c. 603 A. D. 在位。)北齊滅亡の報は達頭汗の時、猶突厥に在つた Valentinus に傳へられたかも知れない。ともかくビザンツの翻譯者・註釋家が突厥可汗の名を皇帝の名におきかへたのである。

一方陳が隋により征服されたことも突厥に注意され

ないことはなかつた。ビザンツではこの相つゞ大事件を聞いて兩者を混亂して了つたもの、シモカツタの記事が本源的に北支の事件を取扱つてゐると見るべきである。

(10) Taugastの君主には七百人の婦人が侍する。

隋文帝も周武帝（北齊を亡ぼした）も嬪御の数は少かつた。しかし武帝の子宣帝と北齊後主緯は後宮生活の奢侈で有名である。そして北史卷八・北齊書卷七によれば後主の父湛は夢に幽鬼を見たが、彼の七百人の宮女もそれを目撃したといふ記事こそ、最もよくあてはまる。

(9) 都では妃嬪は一頭の牡牛のひく金の車に乗り、貴族の婦人は銀の車に乗る。

隋書十によれば周では、婦人の乗る車の若干は牡牛がひくが、大部分は馬車である。北齊では公主は漆ぬりの牛車にのり、車も牛も、鍍銀又は地銀を附ける。

(5) 人民が金の裝飾をすることは法律で禁ぜられてゐる。金銀は國內で豊富に商業により流通してゐるに係らず。

前條の記事がこの事を豫見させる。周の宣帝が官吏

に金の頭飾を止めしめたことか、又はその文武帝が節儉身を持し、金・珠玉を用ひず、恐らく國中にもそれを禁じたであらうことが、これに當る。

(3) 王位繼承の問題はなく君主の家族間で世襲される。

(4) 偶像崇拜、正しき法、中庸をえた智は住民の特性である。

これ説明を要せぬ。偶像崇拜は佛教をさす、北齊の方が盛んであつた。其他は遊牧人が漢人の如き文明民族を記述する常套文句である。

(2) タウガスの君主は神の子を意味する語 *Tauou* と呼ばれる。

Mauroti 以來、この語を天子の訛となし、*Mauroti* はアルメニア人が外國王をよぶ *Tauou* に修正比定した。ユールは唐の太宗とした。しかしこれは太上の譯と見るのが最適である。廢されたり自ら禪位した君主が太上と稱せられた例は、司馬倫に廢された司馬衷、子の呂紹に禪つた後涼の呂光、北魏の獻文帝弘、北齊の高湛、同じく高緯、天元と特に稱したけれど北周の宇文贇、隋文帝、唐の李淵により隋煬帝、及び李

淵自身である。

注意すべきは自發的に禪位して太上となつた人々は猶重要國事處理の權を保有し、獻文帝の如きは蠕々・鐵勒征伐の如き、特に對外的な軍事・政治を主宰した。高湛 宇文贇もこの例に洩れないと思はれる。

今問題となつてゐる時代、北支で太上と稱した君主は、

(1) 北齊で五六五—五六九、(2) 北齊で五七七年中半月間、(3) 周で五七九年四月から五八〇年六月迄、三人ある。特に高湛が太上を稱した年、齊と突厥との關係は親密になり、周宣帝の最後の二年に、齊の太上の從弟高紹義を援けその強敵の周の太上に當つた。シモカツタの記事はこれを斥したものである。

(1) その國、その國民その主都はタウガスと呼ばれる。
撰・Pelliot (TP. 1912, 792) 教授は Taagart の名は北魏をトルコや蒙古の呼んだ俗稱、拓跋 tak-buāt を寫したもので、トルコや中亞、イスラム史料の Tabrac Tabrac の形に當ると主張した。

拓跋の語義に關しては、(1) 土后(トルコ語) tūhap-ci, tay-basi (2) 奴隸(トルコ語) tabiy-ci (3) 長孫 tap + aci <

haci (4) 索頭 tuy + bas (5) 被はれたる、氈の中で生れたる(蒙古語) toy + qubça (6) 元↓源 跋は(トルコ語) bas (7) 逐越 duiik b'uat (8) 金屬工 to juyaci 山を越えたる彼等 dabayaci (蒙古語) 暗示されたトルコ・蒙古の語源論は、喉音と唇音との字位轉換 (T'ak-b'uat vs. tk Tabrac) は偶然ではなく、支那邊境で Tabrac が屢々 Taybac, Toybac と響いたことを示す。

(8) タウガス市はアレキサンデル大王により、そのバクトリア・ソグデアナ征服の後建設された。

(12) タウガスから數哩はなれて Khubdan(xoußdān) と呼ばれる都市あり、亦アレキサンデルにより建設されたと云ふ。

(13) 二の河が糸杉の並んだその市を貫流する。Khubdan は周の長安地方を指したに違ひないが、その語は漢代の咸陽 arch. s'um-dang の名を寫したものと考へられる。二河は渭・汾二水である。ギリシア人はアレキサンデルの征服が支那に及んだと想像し、トルコ人がそれを相承けて、大王によりこの市が建設されたとする Alexandrian Saga を作つた。

(14) タウガスの人民は印度人と交易し多數の象を有

する。

(15) 彼等は蠶を飼ひ、養蠶に秀づ。

象は南方からの貢物であつたから、トルコ人の見聞が黄河以南に及んだといふ證據になる。

(11) 婦人は剃髮黑衣して主君の喪に服し、陵の傍を去ることを禁ぜられる。

これは后妃・宮女が皇帝の死其他の場合、佛寺に避難し、尼となる風習を傳聞したものであらう。

要之、テオフィラクツス・シモカツタの記事は六世紀末北支那の驚くべき正確な記述を残してゐる點で貴重である。

其二 On the Use of the Animal Cycle

among "Turk-Mongols"

ペリオ教授は、その "Le plus ancien exemple du cycle des douze animaux chez les Turcs" (TP. 26, 201—212) において、トルコ族の間で最も早く獸圈が使用された例は沙鉢略が隋文帝にあてた書面で、開皇四年甲辰(584 A. D.)を獸圈の龍に當る支那の十二支の辰字で指示してゐることを證した。しかしトルコ・モロコ族の間で獸名を以て年を呼ぶこと(十二支では

なくて)は(564 A. D.)北齊に人質になつてゐた宇文閼姫の名でその子宇文護にあてられた手紙の中の「汝兄弟大者屬鼠、次者屬兔、汝身屬蛇」に見える。閼姫と宇文顥との間の子、什肥(A. D. 603 戊子生)護(613? 癸巳生)導(611—655 辛卯生)である。即ち北族の間で當時、生れた子をその年の十二支で呼ぶ風習があつた。北史卷七高洋傳に「馬子入石室三千六百日」といふ譏があるが、此は高洋即位後三千六百日以内に入るといふ意味である。北史五の宇文泰の政治的役割を豫言した「狐非狐。貉非貉。焦梨狗子齧斷索」の言は泰の字黑獺が拓跋氏(索頭)に代ることを意味し、泰は五五六年、五十歳で死んだから、五〇六年生れとすれば丙戌の年である。

この風習——即ち獸圈の chronogrammatic の適用は更に古く、石虎は永喜五年(321)に十七歳であつたから二九六年甲寅の生れ(二九六は二九四の誤りか? 紹介者)で虎と名付けられ、石勒の名は羯勒の略で、トルコ・モロコ系の blisun の譯である。彼は二七二年壬辰に生れたか受胎して、龍の特殊な保護にあると信じたものだらう。

この風習が支那起源か北族起源かは決しがたい。純支那的と認められるのは曹虎(南齊書卷三十)の例である。又、南齊の東昏侯は野猪とよばれ實に四八三年癸亥の生れ、梁武帝は四六四年甲辰の生れで龍として語られ、四六二壬寅生一五〇一年死の蕭顓冑は虎と斥言された。支那固有の獸圈の紀年學的使用の研究は更に大きな問題を構成してゐる。

以上、論文の概要である。著者の態度は考證する者の正にとるべき着實精到を有し、支那史料の中から可及的多くの事例を援引し來り數箇の可能なる解釋の内に就いて最も蓋然的なるものを採り、その確實性の根據と共に、史料に誤謬や差異の生ずる因由を明かにし以てその論斷を重からしめてゐる。史料の缺乏がその考證の筋道を困難ならしめてゐる點なきに非ずとは云へ、全體に向けられた洞察は結論を誤らしめてゐない。第一のテオフィラクスの本文批判に就いては、夙に桑原博士は「支那人を指すタウガス又はタムガジといふ稱呼に就いて」(東洋文明史論叢所收)に於て解釋を下された。今、著者の所論の中、注意すべきは、東魏(北齊)

の尙色が赤なりしことを以て、シモカツタは主として北支に於ける周齊の争ひを傳へたもので、會々隋が陳を平定した記事と混同したもの、従つて、クラプロートの説に反對し、大河はむしろ黄河とすべきことを斷じた。又、Toussaint 太上説の創唱は「神の子」の意味にそぐはぬ缺點はあるが單に語の解釋の外に、會々六朝時代の君主政治の變態を注意したる點で、發展すべき問題をはらんでゐる。タウガスの語義の解釋については、大體 De Guignes, 白鳥 Pelliot 諸氏の北魏にあつてゐるもの、Hirth, Laufer 桑原諸氏の唐にあつてゐるもの、二説あり、特に桑原博士は前記論文で唐家子説を創唱されたが、著者はペリオ教授の説を承け、その土名の語源の解釋がいかに困難であるか、然し歴史家や社會制度の研究者にとつては、その實際の意味が昔嘗つて何でありしかを發見することよりも意味せられたる名をいかに民衆が考へたかを知ることが更に重要であると論じてゐる。六朝時代の五行説や獸圈使用の現象は西方史料と支那史料との比較考證に觸發されて六朝文明の性質を説明する一の有力なる手掛りとなるであらう。[H.J.A.S. Vol. 3 n. 344. Des. 1038] [宮川尙志]